

Title	「-的」ということばの発生と変遷
Author(s)	金, 曙泳
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59369
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【26】

氏名	金 晴 詠
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 25334 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	「一的」ということばの発生と変遷
論文審査委員	(主査) 教授 岡島 昭浩 (副査) 教授 金水 敏 教授 石井 正彦

論文内容の要旨

本論文は、「的」という造語要素を持つ「一的」という形態素について、その発生以来、現代に至るまでを通時的に研究しようとしたものである。A4判で128頁、400字換算で500枚相当である。

第1章で研究の必要性を述べた後、第2章で、近世日本における中国俗語文学(白話文学)の影響下にある作品の「一的」の用法を調査し、近代日本語の源流を確認している。

第3章では、大槻文彦『復軒雜纂』に記された「一的」の発生事情についての検討を行う。すなわち、大槻周辺の人物が「一的」を使い始めた、ということについて、検討したものであり、その大槻周辺の人物の文章について、「一的」の用例を探し、同時代の他文献との比較から、大槻文彦らによる翻訳文には比較的早い時期から多様な用法の「一的」が使われていたことを確認している。

第4章では、「一的」の語基制約、すなわち、「的」の前に来る造語成分の制限について、歴史的変遷を追い、かつては無かった制約が「一的」の定着とともに出来上がって行くことを示した。

第5章・第6章では、「一的」が通常の形容動詞語幹とは異なるものとして、語幹のみで修飾が行われることを中心に取り上げる。第5章で取り上げる連体修飾用法では、「一的ノ〇〇・一的の〇〇」から「一的〇〇・一的ナ〇〇」へ変遷して行く様を、「状態性」ということを中心に示している。第6章の連用修飾用法は、「比較的」が連用修飾するようになった理由を通時的に考察したもので、これも連用修飾用法をもつ「可及的」なども視野に入れ、それらの使われる構文的な面から考察した。

第7章は、「一的」の位置づけとして、「一上」「一風」などとの比較を通時的に行い、その関係が変遷したことを示している。

第8章に於いては、近年用法を拡大したと言われる「一的」、すなわち「わたし的には」などについて、これを通時的に位置づけようと企て、これに類する用例を明治期から現代に至るまで拾い、その共通点・相違点を考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴は、「一的」の発生期周辺から定着期に至るまで、多数の文献を渉猟し、その用例を徹底的に分析したことにある。近代日本語の特徴である漢語による造語等にかかわる「的」は、先行研究が多いが、発生期の用例を探るものであったり、現代語の用法をみるものが中心であり、本論文のように通時的に、かつ、資料の性格をも意識しつつ整理したことは大変意義深い。

大槻文彦周辺の人物の翻訳文を調査し、同時期の翻訳文と比較して「一的」の使用が顕著に見られることを初めて明示したことには意義がある。その後の時期に於いて、翻訳と翻訳ではないものの「一的」の現れ方に時代差を見出したことも重要な指摘である。

「一的」の連体修飾用法と申請者が位置づけるものについて、「一的〇〇・一的ノ〇〇」から「一的〇〇・一的ナ〇〇」へと変遷してゆくということ、実例に基づいて明示したことも有意義な指摘であるし、その変遷の理由を探ろうとしていることも評価に値する。

「一的」の連用修飾用法と申請者が位置づける「比較的」については、従来、現代語における、その特殊性については指摘があったものの、それを明治期から用例を探索して位置づけようとしたことも大いに評価できる。

問題点として、「一的」そのものについての目配りは十分なのに、その周辺への目配りが、なお望まれるということがある。即ち、漢語全体での位置づけはどうか、
「的」以外の形容動詞の語幹の用法にどのようなものがあるのか、連用修飾・連体修飾とはどういうことか、などである。また、翻訳・非翻訳ということの他にも資料を分類できなかったのかという点や、多くの用例を拾ったのに、本論文上では数字による報告が中心で、具体例の提示が少なく感じられる、などの点もある。また、韓国語を母語とする申請者であるので、日中韓の比較も視野に入れた論もあると、より有意義なものになったろうとも思われる。

そのような問題点や発展させるべきところがあるものの、全体として、「一的」の日本

近代語における発生・変遷を記述するものとして、申請者の調査能力とそれを纏める力などを読み取ることが出来、大きく評価に値するものとなっている。

なお、2012年2月6日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。